

# 狂気を語る言葉

## —— 高橋新吉『狂人』について ——

松 田 正 貴\*

Representing Madness:  
—— A Study of Takahashi Shinkichi's *Madman* ——

Masataka MATSUDA \*

### 【要旨】

昭和3年10月、高橋は、岐阜県美濃加茂市正眼寺で参禅中、精神錯乱に陥る。小説『狂人』（昭和11年）は、この発病から回復までの数年間を描く。一人称語りによる自伝的小説だが、語り手である「私」が時折精神錯乱に陥るため、事の真相がよく分からない箇所がある。正眼寺で経験した精神の崩壊を事実のとおり書き記すと宣言する「私」だが、狂気があるがまま描写すること自体が尋常な試みではないとやがて気がつく。本論では『狂人』において狂気がどのように語られたのか（あるいは語られなかったのか）を考察する。自らの狂気を言語化しようと試みた高橋だが、自己完結的で自己言及的な日常言語の内部で狂気を語ろうとするあまり結果的に語りの破綻を招くことになった。本論は、この破綻してはいるものの常に意識的な「私」の語りに狂気を語る言葉の可能性を見出そうとするものである。

### はじめに

『高橋新吉全集IV』（1982）巻末付属の年譜「昭和3年（1928）27歳」の項に次のような文言が見られる。

十月、岐阜県美濃加茂市伊深町の妙法山正眼寺で坐禅を習う。接心中、病を発し、郷里で数年間静養。

『狂人』（1936）は、この発病（精神錯乱）から回復までの数年間を描いた長編小説である。一人称語りの自伝的小説だが、語り手「私」が時折精神錯乱に陥るため、事の真相が有耶無耶になっ

---

\* 大阪電気通信大学工学部英語教育センター講師

てしまう箇所もある。そもそもこの作品自体、自伝的小説でありながら、単一的で直線的な事実の羅列を企図して書かれたものではない。小説の終盤、「私」はこう打ち明ける。

此れは事実ではないと云ふ事を作者は附記する。

此の世の中には事実と云ふものはない。それは或人々にとっては事実でも他の人々にとっては絶対に事実ではないと信じられる事の中に世の中は充ちてゐるのだから。<sup>1)</sup>

事実はどれも相対的だという考えが作品の通奏低音としてあるが、それでもなお「私」はあえて事実の再現を試みる。

猛烈に諸縁を放下して、大悟を期するのには此んな所ではいけないと思つたりした。しかし私は小南老師のおかげを蒙つて、將に発狂したのである。其の夜の有様を私は如実に描写したいのである。<sup>2)</sup>

正眼寺で経験した精神の崩壊を「如実に」つまり事実のとおり書き記すべく筆を起こす「私」だが、狂気があるがまま描写するということ自体が尋常な試みではないとやがて気がつく。狂気を語ること、あるいは語りえないものを語ること、この無謀ともいえる語り手「私」の試みが事細かに記録された小説、それが『狂人』である。

狂気を語るという不可能な試みを小説の形式で展開する際に、高橋は「狂気」にまつわる同時代的言説からさまざまな言葉や論法を借用する。以下、同時代的な狂気の言説と高橋との関わりを概観した上で、『狂人』における語りの仕組みを検証する。

## 1. 狂気に関わる同時代的言説

狂気を語る際に、高橋が用いる言葉や論法は別段目新しいものではない。『狂人』における狂気の語りは決して高橋のオリジナルなどではない。<sup>3)</sup> そもそも『狂人』のストーリー自体、例えば夏目漱石の門下であった中村古峯の長編小説『殻』の圧縮版と見做すことも可能である。漱石の斡旋によって「東京朝日新聞」にて連載された『殻』(1912)は、神経衰弱に陥った男(為雄)が暴れて、母や妹を追いまわす、いわば「狂人」小説の一つである。母お孝の必死の看病にも関わらず、為雄はお孝を殺すといって追いまわす。肉親の愛は悉く踏みにじられ、やるせない思いに母は苦しむ(「お孝はこれほどに思つてゐる自分の心が、まだ病人には分からないのかと考へると、口惜しさが胸一杯で、弁解の言葉も出て来なかつた」)<sup>4)</sup> お孝は自分の無力を嘆き、やがて出家して尼になる。『狂人』の場合、息子の狂態を悲観した父は自ら命を絶ってしまう。ただ、一人称語りの『狂人』に対し、『殻』は三人称語りで、狂人の暴力的なまでの絶望が描かれることはない。また『狂人』の場合、「私」は座敷牢に監禁され、ひどい扱いを受けるのだが、『殻』の為雄の場合、「座敷牢に入れろ」という周囲の声はあるものの、母はそれを避けるように為雄を病院に入れる。また、弟の入院を機に帰郷した兄の稔は、弟が残した日記を読み、弟の精神錯

乱が、ある失恋をきっかけにはじまったことを知る。ちなみに『狂人』の「私」も失恋を機に正眼寺に向かう。このように一人の狂人をめぐるストーリーの展開が似通っているため、高橋が中村の語りを模倣したとする説も成り立たないわけではない。しかも高橋は、中村が創刊した日本精神医学会の月刊機関誌『変態心理』に「乞食夫婦」という一文を寄稿している。<sup>5)</sup> 少なくとも、中村古峽あるいはその周辺について高橋が通じていたことは確かである。高橋が『殻』を読んでいたとしても不思議ではない。

ただ、狂人にまつわる言説は、この二つの小説に限られるわけではない。『狂人』との関係でいうなら、例えば、座敷牢のある光景は島崎藤村『夜明け前』の最終部において克明に描かれているし、分裂症的な妄想（「早発性痴呆症」）は芥川龍之介の晩年の作品『或阿呆の日記』や『歯車』においてすでに一人称で語られている。また叶わぬ恋ゆえの自己喪失の狂気というテーマにいたっては枚挙にいとまがない。明治の文学者に「愛と狂気の物語」という枠組みを用意したシェイクスピア『ハムレット』はもちろんのこと、そのオフィーリア的狂気を『源氏物語』における「空蝉」と重ねあわせる形で虚構化した樋口一葉「うつせみ」は近代日本文学における「狂人小説」の先駆けである。また、『狂人』の第二部で繰り広げられる狂気じみた夫婦喧嘩、このテーマも岩野泡鳴が『発展』『毒を飲む女』においてすでに大々的に展開している。象徴主義の詩に見られるような頹廃的な雰囲気や未来派およびダダのニヒリズムなどにも狂気の言葉を読み取ることができる。このようなさまざまな狂気の言説に耳を澄まして、自らもその言説の中に出て立つ形で高橋新吉は『狂人』を書く。『狂人』は同時代的な狂気の言説のブリコラージュであるともいえる。しかしそれは単なる借用ではない。そもそも「単なる借用」などありえない。差異を伴わない反復などない。他の言説の借用は同時に差異の刻印でもある。もしそうであるなら『狂人』における差異の刻印とはいかなるものか。それを検証する前に、以下しばらく高橋新吉という作家の特異性についても簡単に触れておきたい。本論では、作家と作品を完全に切り離す手法をとらず、作家にまつわるエピソードもまた同時代的言説の、あるいは本論がそれによって成り立つところの言説の構成要素と見做す。

同時代の作家たちのあいだで高橋の特異性はどこにあったのか。飛躍の多いその文体もさることながら、高橋の特異性となるとやはりその分裂症的気質がまずは思い浮かぶ。正眼寺における発狂以前にも、高橋は発狂事件を起こし、紙上を賑わす。神谷忠孝『日本のダダ』によると、大正12年のこの発狂は文字どおり「事件」だったのであり、「読売新聞」や「東京朝日新聞」にて早々に報じられたという。<sup>6)</sup> 要約すると、「ダダを全世界に宣伝する」と触れまわり、タクシーの運転手をステッキでなぐりつけた廉で、高橋は逮捕され、留置所に収容されてしまう。興味深いのは、当時、高橋の後見人ともいえる立場にあった辻潤の反応である。辻はまるで高橋の発狂を羨むようにこう述べている。「恐らく彼は彼自身のダダを完成させたのかも知れない。そして、僕はなぜまだ発狂しないのであるのか」。<sup>7)</sup> のちに辻自身も精神に異状をきたし天狗となって屋根から飛び降りたりしている。要は、当時の前衛的な詩人たちのあいだではむしろ「発狂」や「狂気」が肯定的に羨望的に受け入れられていたのである。<sup>8)</sup> このような作家たちの狂気への憧れをよく伝えるエピソードの一つが、辻潤訳ロンブローゾ『天才論』（1914）に対する稲垣足穂の反応であろう。ヨーロッパの偉人たちの気質を詳細に論じながら、狂気と天才との類似性を示したこの『天才論』を読み、稲垣は「俺のことを書いたのではないか」と思ったという。ただ、気が

ついてみると周りの友人みな「これは確かに自分のことだ。次のページを見るのが怖い。余りに当たっているから、そこに何が出てくるかもしれない」といい合っていたという。<sup>9)</sup>

同じく辻訳『天才論』を読んだ高橋は、辻もまた「人間の心の分野での天才であった」と述べている。<sup>10)</sup> この辻訳『天才論』はその後、二十数版も増刷を重ねる。<sup>11)</sup> ちなみに『天才論』の基調をなす見解はこうである。

天才と狂気の類似ということは、なにも是非この二つのものが混同されなければならないということを示すのではないが、如何なる場合においても同一の問題から両者のいずれをも排除することが出来ないものだということを証拠立てている。

実際、一生涯のある時期において幻覚に悩まれ、あるいは精神錯乱の状態に陥った多くの天才、またヴィコの如く偉大なる生涯を狂気に終わった多くの天才を挙げるまでもなく、おおよそ偉大なる思想家にして一生を通じ偏狂に罹ることなく、幻覚に悩まされなかった人があるだろうか！<sup>12)</sup>

『天才論』公刊後の一時期、狂気をいわば天才の証しとする向きがあったことは確かである。<sup>13)</sup>

高橋の場合も、大正12年の発狂事件にせよ昭和3年の参禅中の発狂にせよ『天才論』の影響を免れえなかった。特に参禅中の発狂では、大悟という形で「天才」が発現したと高橋は思い込んでいた。

高橋はまた精神医学の言説にも通じていた。大正12年の発狂事件を題材にした小説『ダダ』の出版のことで、高橋は精神科医杉田直樹のもとを訪れている。この杉田の講演集『誰か狂へる』(1924)を高橋は読んでいた。精神病に関する啓蒙の書ともいえる本書において杉田は『天才論』を当てこするかのようこう述べている。

高山樗牛が嘗て精神病院とは天才者の侵入を恐るゝために俗人が設けた防壁である、才気のみありて俗気なきものは皆こゝに打ち込まれるといふやうな意味のことを云つたが、幸ひ我国には防護設備が甚だしく手狭であつて、到底才気者を総て打ち込む席がないから、所謂天才は今日俗界に多数に混在してゐる筈である。冗談はさておいて……<sup>14)</sup>

狂気は、もはや天才を裏づけるものとしてではなく、精神医学の力で治療すべき頭脳の障害と見なされる。本邦初の実施となった「内務省保険衛生調査会第五分科の調査」(大正6年2月)に触れながら、杉田は「同月現在本邦全国の精神病者数約六万五千にして、内公私立病院に於て監護治療を受けつゝあるもの僅に四千五百に過ぎず、各自の私宅に於て不完全なる監置に附せられ家人より獣畜の如くに扱はれ永久に救はるゝの途なきもの実に六万に上る」事実を明らかにする。<sup>15)</sup>『狂人』における「私」は父の死後、座敷牢で監護人の世話を受けるが、その扱いはまさに「獣畜」を扱う如くであった。そのため「私」は座敷牢ではなく大阪の精神病院に収容してくれるよう母に請う(「狂人病院に一時入院さすと云ふ事にしてゞも、私を牢から大阪へ連れてゆくと云ふ事にして下さいませ」)。<sup>16)</sup> いずれにせよ、当時「座敷牢」という言葉は日常的生活からそれほどかけ離れたものではなかったのであろう。座敷牢について杉田はこのように述べている。

誰でも少年時の記憶にあらう。近所に座敷牢へ入れられてゐる狂人があって、時々檻を破つてうそうそ往還へ出て来る。髪はおどろおどろしく衣は見る影もなく切り裂かれて、而もそれを頭から被つてゐる。取止めもないことを大声で叫び乍ら歩み寄つて来る時、此狂人は如何に少年者の眼に恐ろしく映じたることか。夜間此少年が駄々をこねる時、母が「分らずやを云ふとあの気違ひさんにやつて了ひますよ」と云ふとおびえ乍らも黙々と床に就いて、その夜は其恐ろしい姿を夢にも見さう。斯う云ふ先入見が少年の頭にこびりついて、年をとつてからでも精神病患者とはこはい者、精神病院とは恐ろしい所と、見ぬうちに定めて了ふのである。<sup>17)</sup>

さらにレオン・チョルゴスの精神病について論じた箇所、杉田は「被毒妄想」という症状にも触れている。チョルゴスは、第25代アメリカ合衆国大統領ウィリアム・マッキンレーを銃で殺害した男であり、この殺人犯を検診した精神科医の記載したものを一部紹介しながら、杉田はこう述べている。

彼は平素人から毒害されはしないかと妄想的に恐怖し（之を被毒妄想と申します）、自分の食べ物はず必ず自分で料理し、母の用意した食事さへ決して摂りませんでした。<sup>18)</sup>

『狂人』における「私」もまた毒害を「妄想的に恐怖」する。

薬缶に水を入れて、小さな椀に三杯母は食事毎にくれる。私は其の水に何か毒が入つてゐるやうな気がしてならない。<sup>19)</sup>

母が天麩羅を一枚お茶にくれる。其の天麩羅は石のやうに固い。石炭酸か何か毒で固めたやうなものだ。私はそれを塀の外へ落ちるやうに投げる。<sup>20)</sup>

私は母の持つて来るものに毒があるとオラビつゞけて毎日ろくに食べもしないのだ。父は何の理屈からか私に持つて行くなと母をとめるのであつた。それを振払つて母は持つて来る。愈々毒を持つて来たのかとも私は思ふ。<sup>21)</sup>

私の奥歯が一本欠けて抜けたのだ。私は血を吐いたのだ。私は毒を食はされてそれで血を吐くのだ。<sup>22)</sup>

私は川崎が其の前の晩キャラメルの五銭の小さな箱を買つて来てくれた。其のキャラメルの中の包紙が、全部十個とも裏返しになつてゐたのを不思議に思つてゐた。何かの毒をキャラメルに塗つてゐたのだと、誰か医者が私の食事について指図をしてゐるのだと思つた。<sup>23)</sup>

なお高橋の精神医学への関心について纏めた論考としては、和田敦彦「高橋新吉——狂気と



いう方法」(『日本のアヴァンギャルド』)が示唆に富む。高橋の文体と同時代的な狂気の言説との関わりを丹念に探る和田の論において、特に興味深いのは、当時ようやく活字化されるようになった「精神病患者の手記」と高橋の文体との関係に触れた箇所である。その中で和田は、中村古峯『変態心理の研究』(1919)を取り上げながら、そこに引用されている「狂人の手記」と高橋の文体とのつながりを指摘する。先に述べたとおり、中村によって創刊された日本精神医学会の月刊機関誌『変態心理』に高橋は「乞食夫婦」を寄稿している。恐らく和田の指摘どおり、『変態心理の研究』も高橋は読んでいたのではないか。

高橋は狂気をめぐる当時の言説をそのまま借用するだけではない。例えば、松永延造『夢を喰ふ人』(1922)を読んだあと、高橋は『夢を喰ふ人』の著者へ」と題する小文を書く。その締めくくりとして高橋は著者への思いをこう記す。

只俺の恋人は精神病患者だと言ふ事を、お前達に、不図した機会で、俺の、過去の世に於て、俺の母だつたラバーに知らしたい為ばかりなんだ。

それと同時に俺は、輸精管を切つて湯屋の値下げ運動に反対したり加つたりしたいんだ。

ここで仕方がないから私は、松永延造君に此んな風にも書いて貰ひたかつたのです。<sup>24)</sup>

『夢を喰ふ人』では「粗忽」な精神科医下条の語りを通して、様々な登場人物(千里眼をもつ少女や発狂経験のある昆虫学者、自らの子を殺す作家など)の狂気が描かれる。高橋がこの小説に惹かれつつ物足りなさを感じているのは、恐らく松永が狂気を語るのではなく、それを分類学的に記述するからであろう。下条はこう語る。

各々の人が同一の時日に於て、如何に異なる考えを持ち、又異った境遇の中にあるかを明覚するのは決して不用な遊戯ではない。若しも私の知り合った人々が同一の日に書いた各自の日記を互いに示し合わす事が出来たならば、我々は其れによって人間の個性の相異に対して感ずる興味以外に、何かしらもっと教訓的な暗示を与えられるに相異ないと云う期待を私は持つ事が出来た。<sup>25)</sup>

実際、松永はさまざまな人物の手記や日記、談話などから集めた言葉でもって百科全書的に狂気の標本集を作ろうとしたのではないか。これは高橋の方法論とは相容れないものであった。高橋にとって、狂気はやはり一人称で語られねばならなかった。『狂人』において高橋は狂気をどう語るのか。以下、この作品の語りの仕組みに注意しながら、狂気を語る言葉の問題について検証する。

## 2. 隠蔽という方法

『狂人』において「私」の語りは初めからすでに揺らいでいる。「私は精神病患者として、再び檻禁される様な事があつてはと、それを恐れてゐました」と何かを告白するような文体で「私」は

語りはじめる。<sup>26)</sup> ところがその数ページあとでは「郊外の彼女の自炊してゐる家へ……二三日おきに通ふのであつた」と突然重々しい文体に変わり、その後しばらく声調の異なる二つの文体が入り乱れる。

……私は其の禅寺を選んだのでした。

二十八歳の男、其の男が何故自分の父を殺すに至つたか。私は老師を恋するやうになつたのではあるまいか。

東京の雑司ヶ谷の鬼子母神の近くに住んでゐる、或母と娘とがあつた。娘の名は松枝と言つた。其の娘と、老師の目と顎の表現力に共通なものがあつた。

或雪の降る日でありました。<sup>27)</sup>

「あつた」と「ありました」という二つの文体の間に語り手の声が揺らいでいる。「私」の語りは小説全体を通して断定的な響きを帯びているのだが、冒頭ではこのようにやや謙ったような文体が顔を覗かせる（同じ文体は終盤における書簡体の箇所にも見られる）。また、今取り上げた引用箇所では、語り手の視点にも工夫が凝らされている。中心的な語り手である「私」とは別に「二十八歳の男」という三人称の主語が用いられている。ただ、ここでは瞬間的に語り手が客観化されるだけで、すぐに一人称の語りに戻る。このように冒頭から、不安定で頼りない「語り」が演出されるため、読者は語り手である「私」の言葉を警戒しながら読み進めていかざるをえない。

不安定なのは語りだけではない。ストーリーそのものが断片的で、「私」が発狂し拘束されるまでの展開はむしろ明確なプロットを欠いたまま進行する。松枝やIに対する独りよがりな恋、紫山老師への帰依、アナーキストらとの付かず離れずの交流、震災後の復興途上にある東京の風俗、このような断片的なエピソードが脈絡もなく矢継ぎ早に繰り広げられる。謂われない不安に怯えながら都市を彷徨う「私」の疲労と倦怠がストーリーの主題となっており、その中で「私」は弟の幻に憑かれ、天狗に追われ、刑事に尾行されているという妄想に悩まされ、次第に精神が異状を呈するようになり、ついに正眼寺にて参禅中、発狂する。

夜十時過ぎ、小南老師は提灯を持って道場へ行かれる。其の足音が聞こえて来た。私は不二庵でいつもの如く坐つてゐるのだ。

老師の影が障子の間をフィルムのように、大きい頭が上つたり下つたりして黒く動いて行く。二十分ほどして歸りには反対に左の方から右の方に映つて足音と共に消える。夜の緊張した静寂の中にである。

吉野さんの言では、四五年前まで此の寺は接心の時でなくとも殺氣が漲つてゐて、恐ろしい程であつたと云う。私は思はず

「オショウ——」と大きな声を體一杯の声を張り上げて叫んだのだ。老師の影は微動も變調を來さなかつた。

四日目の夜である。

惟精老師が提灯を持って道場へ行かれる影が障子に映るや否や、抜打に、肩先をでも横に払って、グサッと突き刺すやうな思ひで鋭く叫んだのだ。

十分二十分と老師は道場を見廻つて、一緒に坐られる事もあると云ふのだが、不二庵にも歸りに立ち寄られる場合もあると云ふのだが、一語も發しないで黙つて提灯を持つて歸つて行かれた。

何と云ふ其の影の固く重かつた事か、私はそれから下痢をしたのだ。熱が出たのだ。布團を敷いてねて、布團の上へ小便を垂れ流しをしたりした。<sup>28)</sup>

『狂人』における発狂の場面だが、本当のところ何があったのかよく分からない描写となっている。「私」は大声で「オショウ」と叫んだ。引用箇所を読むかぎり、「私」の発狂はそれだけのことである。発狂当夜のことについて「如実に描写したい」と述べていた「私」だが、たったこれだけのことを語るつもりだったのか。もちろんこれだけではなかった。確かに、自らの狂気について「如実に描写」するつもりであったのだが、結局「私」は自らの過剰なる精神作用についていけなくなる。

私は極端な誇大妄想にとらはれてゐた。疲れきつた体に、睡眠も食事も殆どしないので。困惑しきつてゐる私はオボロにしか覚えてゐない。<sup>29)</sup>

「オボロにしか覚えてゐない」出来事を「如実に描写」することはできない。これは狂気を一人称で語る際に当然起こりうる問題である。またそれは「私」の問題でもあり、高橋自身の問題でもあった。発狂中の「私」にいったい何があったのか。語り手「私」の知りえない狂気を高橋は書かねばならない。しかも一人称語りの自伝的小説として語らねばならない。語り手「私」が「オボロにしか覚えてゐない」ことを作者である高橋が語りうるとすれば、そこには欺瞞が生じ、結果的に作品の根底を覆すことになる。高橋は覚えていないものをどう語るのか。以下、少し脱線するが、正眼寺の発狂に対する高橋自身の態度について触れておく。

『高橋新吉論』執筆のため、この作家のもとを二十回以上も訪ねたという鶴崎博は、高橋本人の口から正眼寺における発狂について「一度も聞いたことがない」という。<sup>30)</sup> さらに鶴崎は、高橋新吉という作家を読む上で「そのところ数年のあり方についての研究が是非とも必要なのではないか」と述べながらも、「それもおそらく隠蔽されたままにあいなるのではないか」と半ば諦めてもいる。事実、高橋自身、この正眼寺における発狂についてはむしろ口が重い。<sup>31)</sup> 例えば、自伝小説『ダガバジジンギヂ物語』(1965)において、高橋は正眼寺での発狂について「このことは、『狂人』という小説の中に、私は書いているので、省略する」といって「三年間の監禁生活」について一切触れずに済ませている。<sup>32)</sup> この状況を鶴崎は「隠蔽されたまま」と形容したのであろう。また、和田敦彦は高橋の「狂気」を「表現の達成」と認めた上で、それが「問題の隠蔽と隣り合っている」と述べる。<sup>33)</sup> 狂気が隠蔽される可能性を示唆する鶴崎に対し、和田の論では、狂気が問題を隠蔽することもありうるとされる。いずれにせよ、狂気が隠蔽を招くという点では両者とも立場は同じである。狂気と隠蔽とのあいだには親和性があるのだろうか。

狂気と文学に関する議論の中で、ショシャナ・フェルマンは、真実の隠蔽についてこのように命題化する。



真実は隠蔽された形によってしか顔を覗かせてこない。真実はそれが判読困難であるという事実からしか、その効力を獲得し得ない。<sup>34)</sup>

『狂人』において真実の隠蔽は様々な形でなされる。もちろん「オボロにしか覚えてゐない」と打ち明ける語り手に「隠蔽」の意図があったかどうか定かではない。意図があるとすれば作者である高橋の方であろうが、それを小説の言葉から裏づけるのは不可能である。隠蔽という語の定義自体も一筋縄ではいかない。本論では、『狂人』の中で「真実らしきもの（そのようなものがあると仮定して）」が何らかの形で隠されてしまっていると判断できる場合、その箇所の言語作用を「隠蔽」と呼ぶ。以下、『狂人』における「隠蔽」の例を二つ取り上げ、その効果について検証する。

一つ目の例は、語りえないものを語ろうとするあまり、描写が過剰になってしまったと思われる箇所であり、当局による検閲か、出版社つまり學而書院による自主検閲のためか、一部削除されたものである。

私は最も危険な……者であつても、お寺へまで逃げ込んだのだ。狂人だとしても何も乱暴をしないのだ。（以下二行削除）<sup>35)</sup>

このあとの二行に何が書かれていたのか。それが真実であれ何であれ、何かが隠蔽されてしまったのは確かである。「真実は隠蔽された形によってしか顔を覗かせてこない」とフェルマンが述べているのはこのことであろう。検閲という外的な力によるものであったとしても、隠蔽があつてはじめて真実への気づきが得られる。ただしこの場合の真実はつねに決定不可能なものであり不定形なものでしかない。そこにあるはずのものが見えない状態、あるはずのものを言葉で指し示すことができない状態、これはまた狂気を語る言葉の問題でもある。語ることのできないものを語るという高橋の試みを考えると、先の引用で見たような検閲による部分的な削除はむしろ歓迎されてしかるべき事象ではなかったか。もちろん語るべきことが伏せられたというのなら、それは作家にとって不幸である。しかし、高橋の場合、そもそも語りえないものを語ろうとするのであって、検閲による削除はむしろそれ自体効果的な機能を果たす。容易に解釈可能な日常的言説とは別の何か不気味なものが立ち現れる予感にこのような空白は満たされている。1920年代の前衛詩人たちは検閲を逆手にとったこのような文体上の実験をすでに行なっており、ここに高橋の文体的特異性を見いだすわけにはいかないが、「狂気を語る」という『狂人』のテーマを考えれば、この箇所が削除されたことで、結果的に作品の奥行きが深まることは事実である。<sup>36)</sup>『狂人』は、検閲という当時の全体主義的なシステムをも自らの偶有的属性として包含する作品なのである。

『狂人』における「隠蔽」の例をもう一つ挙げておく。高橋がどこまで意識的であったか定かではないが、「狂気」を語る言葉について考える上で示唆に富む範例の一つとなるにちがいない。

警察の裏口から出たところに餅屋があつて紅白の鳥の子形の祝ひ餅を拵えてゐる。私は其の店の間の柱に掛けてあつた包丁をヒツ掴んで擬した。

軽便鉄道の停車場まで六七丁しかないのだ。朝の七時頃である。空は曇つてゐたが、勢の好い魚を籠に入れてフグとか何かの大きい腹の魚もあつたやうだつたが、私を元気づける為めのやうに、担ひ棒で、又は右手に提げたまゝ、幾人も行き交ふ。私はいつの間にか両手を後にしばられて、猿廻しの猿のやうに長い綱をつけられてゐる。<sup>37)</sup>

この箇所では、包丁を擬してから拘束されるまでの描写が省かれている。気がつく「私」は両手を縛られていたというのである。日常的な言語による理性的で論理的な思考の内部で、「私」は自らの狂気について語ろうと試みるのだが、鬼気迫る瞬間において「私」はそのような理性的な思考の内部から逸脱せずにいられない。結果的にそれは同時代的な倫理コードに抵触するような語りの過剰性に身を委ねることになるかもしれないし、あるいは今の引用にあるとおり語りそのものを回避することになるかもしれない。語りの回避は、最初の例で確認した検閲による削除と同じく、得体の知れない不気味なものが宙づり状態のまま表出の寸前で待ち構えているという印象を読者に与える。もちろんこのような語りの回避は小説の作法における常套手段の一つである。同時代的な狂気の言説から例を引くなら、芥川龍之介「歯車」がある。語り手「僕」もまた狂気を一人称で語る。

何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な歯車も一つづつ僕の視野を遮り出した。僕は愈最後の時の近づいたことを恐れながら、頸すぢをまっ直にして歩いて行つた。歯車は数の殖ゑるのにつれ、だんだん急にまはりはじめた。同時に又右の松林はひつそりと枝をかはしたまま、丁度細かい切子硝子を透かして見るやうになりはじめた。僕は動悸の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まらうとした。けれども誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた。……

三十分ばかりたつた後、僕は僕の二階に仰向けになり、ぢつと目をつぶつたまま、烈しい頭痛をこらへてゐた。<sup>38)</sup>

語りの欠如はときに語りそのものよりも雄弁である。理性的な思考の内部からの逸脱が過剰な言語表現としてなされた場合、同時代的な出版法のコードを侵犯することになり、結果的には削除されてしまう。そのように削除された空白から洩れ聞こえてくる声なき声に耳を傾けるわれわれは、その不気味なイメージを解釈する手立てもないまま、ただ戸惑う。同じことが二つ目の例でも確認できる。包丁を擬する場面からの引用も「歯車」からの引用も、理性的な思考からの逸脱がそのままテキストからの逸脱となるケースである。高橋『狂人』と芥川「歯車」、どちらも狂気を一人称で語ろうとするものである。設定された場面が似ているだけに、かえって文体上の差異が際立つ。芥川はあくまでも狂気を知的に分析し冷静に語ろうとする。つまり芥川の場合、軸足はつねに理性の側にある。一方、高橋はというと、何気ない日常的な語りまでもが得体の知れない不気味なモノに憑りつかれている。「勢の好い魚を籠に入れてフグとか何かの大きい腹の魚もあつたやうだつたが、私を元気づける為めのやうに、担ひ棒で、又は右手に提げたまゝ、幾人も行き交ふ」と語る「私」はすでに世界と特異な関係を結んでしまっていないだろうか。

もちろん『狂人』における狂気の言葉がすべて功を奏するわけではない。理性的な思考からの

逸脱を「私」が客観的に描写する場合、その言葉は必然的に自己矛盾に陥る。後手に両手を縛られたまま、「私」は故郷行きの船に乗せられる。「私は一刻も沈まってはゐない。静かな穏かな気持ちではない」と自らの狂気を誇示しつつ、逸脱する自己を「私」は客観的に捉える。

私は何かを忘れてゐる。丸で此の世の社会的な事だとか、家庭的な事だとか、衣物だとか、住居だとかに就て忘れてゐる。私に思ひ出させねばならぬ。私は自分の生命の危機にある事なども忘れてゐる形だ。性欲の事も忘れてゐる。<sup>39)</sup>

語り手が「忘れてゐる」ものをどうして語りうるのか。狂気を語る言葉の問題はここにある。理性的な思考の言語によって、その思考の「外」、つまり狂気を語ることは原理的に不可能である。この引用に見られるような客観的な描写によって狂気を捉えることはできない。また狂気の客観的な描写は読者の不信を買う。語られた狂気が偽装されたもの、あるいは奇を衒ったパフォーマンスであると読者に判断されかねない。もちろん、本論において、『狂人』における狂気の真正性について何らかの結論を出すつもりはない。高橋の狂気が本物であろうと、単なるパフォーマンスであろうと、狂気を語る言葉の問題が解決されるわけではない。高橋の狂気が本物であったか偽物であったかはさておき、この作家は言葉で語ることの空しさをいつも念頭に置いてものを書く。<sup>40)</sup> 狂気を語る際、確かに言葉は役に立たない。しかし狂気を語るにはやはり言葉に頼らざるをえない。『狂人』において高橋は狂気を客観的に捉えようとする自己の欲望に抗いつつ、狂気を語る。狂気について語るのではなく、狂気を語る。客観的描写という罫に何度もかかりながら、高橋は狂気を語る可能性を瞬間的にではあるが裂開する。開いた瞬間に閉じてしまう刹那的な仕掛けであったとしても、そのような瞬間を高橋は作品中に散りばめる。その点、高橋はつねに意識的である。決して精神錯乱などしない。錯乱せず意識的に狂気を一人称で語りつづける高橋こそ実に狂氣的ではないか。

### 3. 狂気の遍在と回復の問題について

同時代的な狂気の言説から影響を受けつつ、高橋はより過激な表現を模索する。「狂人」を描く既存の小説との差異化を図るためにも、高橋は一人称語りのより過激なものを書かねばならなかった。精神医学というまだ新しい制度の内部ですでに管理されつつあった「精神病患者」ではなく、いつでも倫理コードに抵触しうる生きた「狂人」を高橋は描こうとした。裏を返せば『狂人』の語りには、同時代的な狂気の言説への批判も込められているのである。重苦しい「私」の語りの背後に時折覗いて見える諧謔的な言葉は、同時代的な狂気の言説の「外」への志向を示す。

私を捕縛して、死刑に処せよと言ふものと、精神病患者だから、危険な恐れがあるから精神病院に檻禁するのが至当だと云ふものとあつて、私に感づかれないうに色々と精神鑑定などとした結果、さっぱりわからないのだ。<sup>41)</sup>

何とかして私は精神病患者としてゝなく、只身心を消耗し尽した憐れむべき白痴としてゝも好い。何等拘束したり檻禁したりする必要のない行路病人として故郷の町へ一刻も早く帰りたい。42)

だがいつまでも私は牢の中の生活をつゞけなければならないのか、なほらなければ十年でも入つてゐなければならないと母は言ふ。だが癒つたと云ふのは何う云ふのを云ふのか。私の精神が何んなであるか外部から決してわかるものぢやない。私自身にも自分の心が何うなるか決して自分でわかりはしない。外面に表れた行動や言語で以て僅かに察知する丈けだ。私はなるほど一刻も静かにしてゐないほど昂奮し、乱暴をする。私は何度格子を破り板を折つて牢の外へ出ようとしたか知れない。大工が来て金槌に呪ひを込めて力一杯釘を打ち込む。格子に又格子を拵へる工合にするのだ。でも此んな牢の中へ私を長く檻禁して置く必要が何処にあらう。檻禁などするから私はアバレるのだ。43)

この最後の引用にある「狂気からの回復」の問題も『狂人』におけるモチーフの一つである。ただし本論では、狂気からの回復が現実的に可能かという問題には触れない。これは高橋の狂気が本物か偽物かという問題と同様、どちらにせよ狂気を語る言葉の問題には影響しない。いずれにしても「狂気からの回復」を描く高橋の語りには巧妙な仕掛けが施されているのであり、以下、その点に話を絞りながら纏めてみたい。

日常的な言語による理性的な思考の「外」、そこに狂気があるとするなら、一人の狂人の日常は「外」を内側として生きるもの、つまり狂気の内側で営まれる。その狂気からの回復ということになると、やはり狂気の「外」への気づきがなければならない。狂気の「外」とは何か。

『狂人』は二部から成る長編小説であり、一部「心静かに死ぬべかりける日」は、正眼寺における「私」の発狂にはじまり、父の死で幕を閉じる。二部「壁土の中に塗り込められた虫」では、新しく座敷牢の監護人として雇われた川崎という名の夫婦による邪険な扱いを耐え忍ぶ「私」が奇跡的回復を遂げる（本当に回復を遂げたかどうかは不明）までが描かれる。二部において「私」は父の自害に対する自責の念に苦しむ。ただ、牢に入れられ、狂乱していた「私」には父の死の真相を知る手掛かりがない。

父が縊死して死んだのか、如何やうな死に方をしたかは、狂乱してゐた私には判然してゐないのであるが、父が自殺した事は確な事だと信ずる事が出来るのである。そして其の父をして、死に導かしめた最大なる因は、之も又確に私の狂乱にある事も承認しなければならないのである。44)

「私」には父の死の真相が伏せられている。父の死は、狂乱する「私」の「外」で起きた出来事である。この父の死が「私」の回復のきっかけとなる。

父の自殺によつて私は自分の心身を甦らす事が出来た。……私が狂気になり自暴自棄になつたが故に父も亦狂気になり自暴自棄になつたのだと思う。45)

それまで「私」にとって狂気は個人的な問題であった（「私の精神状態は完全に異状を呈して来た」）。<sup>46)</sup> 周囲の人間が「正常」で、巡査の監視に付け狙われている限りにおいて、「私」は狂気的な振舞いでもって暴れ回ることができた。それが「私」の「私」であるゆえんでもあった。しかし、父の自殺をきっかけに、「私」は狂気が個人的な問題ではないと気づきはじめる。「私」自身の狂気の中に、父の死というもう一つの狂気が闖入してきたのである。自己の内に限られていると思っていた狂気が、父の死によって二重化されたことで、鏡像的な自己認識の段階を通過した「私」は周囲の人間の狂気にも次第に目が向くようになる。二つの狂気をつきあわせることで、狂気の「狂気性」が露呈し、狂気性への気づきが一人の狂人を狂気の「外」へと誘う。もはやそれは「外」ではない。狂気と狂気の「あいだ」、いわば狂気の小休止である。『狂人』において、狂気からの回復は「狂気からの一時的な離脱」として描かれる。そのような離脱者はいつでも狂気の領域へとまた踏み入るにちがいない。全快の状態は来たるべき可能性として先送りされる。

二部「壁土の中に塗り込められた虫」における「私」の語りはまだ尋常とはいいがたいが、一部に比べると全体的に穏やかである。一部において、自らの狂気を語った「私」は、二部では依然として被毒妄想に苦しみながらも、監護人である川崎夫妻の狂気じみた行動を淡々と記録する。狂気は「私」の中にあるだけではない。座敷牢を取り巻くすべてにおいて狂気が顔を覗かせる。狂気が個人的な問題である限り、「私」は暴れることができた。しかし、狂気が遍在するようになると、「私」の立場は見られる側から見る側へと移行し、監視の対象から観察の主体へと変わる。

川崎と女房とはひどい喧嘩をするのである。川崎が女房を擲るのであった。女房は首を吊る真似をするのである。川崎の指に噛みついたり、「殺せ！殺せ！」と言っている。

「うろうろしたほさんと、出て失せ！とこばれ！」と川崎は叫ぶ。おいおい女房は泣き出してゐる。ドタンバタン物がヒックリかへるのであった。<sup>47)</sup>

巡査が帰ってから私は半殺しの目にあつたのである。水をバケツに何杯かけられたか知れない。しまいに鶏の毛虫を殺す為に役場から貰つて来てゐた石炭酸をかけかけるのであった。<sup>48)</sup>

二年半の牢の生活が如何に忍苦に充ちたつらいものであるか川崎の女房も知らないわけではないのに此の糞垂れ婆は、半狂人のやうなヒステリイ女で、夜中に出刃庖丁をゴリゴリ砥石で二時間も研いで、川崎を切り殺すとおどしたり、朝も九時も十時もまで寝て、めしも気が向かないと焚きもしないのだ。<sup>49)</sup>

いまだ誇大妄想の影響が見られるものの、「私」の語りは確かに客観的になりつつある。先にも述べたが、この狂人たちの世界からどうか連れ出してくれと「私」は母や姉に手紙を書いて頼み込む。ここで小説は終わるので、「私」が本当に回復したかどうかは定かではない。ただ『狂人』の附録において高橋は最後にこう書いている。

我が発狂記は此れで終る事にする。一体誰が発狂したんだ。何うして又三年間も檻置して牢から出したりしたんだ。如何にして精神病が治癒するかをも病理学的に解説し、牢から出る



ところも書きたかつたんだが。一先づ筆を置く事にする。<sup>50)</sup>

「一体誰が発狂したんだ」という言葉は杉田直樹『誰か狂へる』と共鳴する。近代的な社会においては「一人として何等かの精神病的特徴を他人に捉へられてゐない人はいない」という杉田の思想を高橋は踏まえていたのではないか。<sup>51)</sup> 昭和11年、「一体誰が発狂したのか」という問いを発した高橋にとって、戦時体制を強化しつつある日本の言説はさぞかし狂気じみていたことだろう。

## おわりに

狂気にまつわる同時代的言説から言葉を借り受けながら、高橋は『狂人』を書いた。確かに高橋は当時の言説から様々な言葉を借りてくるのだが、どの言葉も狂気を一人称で語るには不十分であった。最も鬼気迫る瞬間においてテキストに空白が生じるのはそのためであろう。『狂人』の二年前に出版された『戯言集』（1934）箴言56において高橋はこんな風に呟いている。

私の考へは言葉に現はす事ができない。適当な言葉が見つからないのだ。<sup>52)</sup>

狂気を語ろうとする高橋にとって「適当な言葉が見つからない」という問題はつねに悩みの種であった。『狂人』と同年出版の詩集『新吉詩抄』（1936）でも高橋は言葉の問題に触れた詩を書いている。冒頭のみを引用する。

言葉は要らざるものゝ第一である。

我等言葉なくして生きたいと思ふ。

初めの言葉に継ぎ足すべき言葉はどこにも発見する事が出来ない。<sup>53)</sup>

高橋の中で言葉の問題が具体的な形で纏まってくるのは、正眼寺における発狂事件の前後あたりからである。それ以前にも問題意識くらいは持っていたであろうが、「言葉」そのものを主題とする詩が書かれるようになるのはこの頃からである。正眼寺での精神錯乱の一月前に出版された『高橋新吉詩集』（昭和3年）でも高橋はすでに言葉の問題に触れていた。

人間が言葉によつてしか物を考へられ得ないと云ふ事は不幸な事だ。<sup>54)</sup>

自らの狂気を言語化しようと試みた高橋は、やがて言葉の「外」を見据えるようになる。自己完結的な日常言語の「外」をどう語るのか。このあと高橋は繰り返しこの問題に立ち帰る。

もちろん日常言語の「外」を指摘したのは高橋が初めてというわけではない。少なくとも萩原朔太郎が『月に吠える』（1917）「初版の序」においてこの問題について触れている。高橋自身は「手にとって読んだことはない」と否定しているが、辻潤と親交の深かった萩原のことであるか

ら、高橋もまた本詩集を手にとって読む機会があったのではないか。いずれにせよ、当時の前衛的な作家たちの言語観を知る手掛かりになると思われるので、少し長くなるが萩原の論を引用しておく。

私はときどき不幸な狂水病者のことを考へる。

あの病気にかかった人間は非常に水を恐れるといふことだ。コップに盛った一杯の水が絶息するほど恐ろしいといふやうなことは、どんなにしても我々には想像のおよばないことである。

『どういふわけで水が恐ろしい?』『どういふ工合に水が恐ろしい?』これらの心理は、我々にとっては只々不思議千万のものといふの外はない。けれどもあの患者にとってはそれが何よりも真実な事実なのである。そして此の場合に若しその患者が…何等かの必要に迫られて…この苦しい実感を傍人に向かつて説明しやうと試みるならば（それはずるぶん有りそうに思はれることだ。もし傍人がこの病気について特種の智識をもたなかった場合には彼に対してどんな惨酷な悪戯が行はれないとも限らない。こんな場合を考へると私は戦慄せずには居られない。）患者自身はどんな手段をとるべきであらう。恐らくはどのやうな言葉の説明を以てしても、この奇異な感情を表現することはできないであらう。

けれども、若し彼に詩人としての才能があつたら、もちろん彼は詩を作るにちがひない。詩は人間の言葉で説明することの出来ないものまでも説明する。詩は言葉以上の言葉である。<sup>55)</sup>

萩原のいう「言葉以上の言葉」を高橋も求めていたにちがいない。高橋の場合、「狂気」をめぐる言説の中でそのような言葉の可能性への気づきが得られた。高橋にとって狂気は手段であり、発狂は芸術であった（「発狂は地震と同じだ。必ず余震がある。／発狂のも一つの芸術である。熟練を要する」）。<sup>56)</sup> しかし「言葉以上の言葉」とはいったい何なのか。「人間の言葉」が伝達可能なものを前提として成り立つなら、「詩の言葉」は伝達不可能なものを語り継ぐ。伝達不可能なものは決して「伝達不可能なもの」として現れることはない。それはつねに伝達可能なものを遮る横断線として示される。いわば「伝達の失敗」として現れるのである。かつてジャン＝ポール・サルトルは、このような伝達の失敗を「散文の廃墟」と見なし、それはまた「現代詩の起源にある態度」であると指摘した。<sup>57)</sup> その意味で、高橋新吉『狂人』は「散文の廃墟」と同時に、詩が生じる瞬間を招聘するものでもあった。『狂人』における狂気を語る言葉は、限りなく標的に近づきはしたものの、事実確認的な言説の規範に照らし合わせれば「伝達の失敗」だった。しかし、ふたたびサルトルの言葉に頼るなら、「言葉を利用する企てが失敗すれば、言葉の無関心な純粹直感がそのあとを襲う」という意味で、『狂人』における行為遂行的な語りは間違いなく一つの達成だった。<sup>58)</sup> 同時にそれは次なる伝達不可能性への呼びかけでもある。

## 註

- 1) 高橋新吉『狂人』(学而書院、1936) 223.
- 2) 高橋『狂人』57.
- 3) 高橋自身「オリジナルな言葉などありえない」と考えていた(「初めの言葉に継ぎ足すべき言葉はどこにも発見する事が出来ない」)高橋新吉『新吉詩抄』(版画荘、1936) 44. また、狂気を語る言葉の問題は明治の作家にもすでに見られる。例えば、樋口一葉は「うつせみ」において、雪子の狂気をオフィーリア的な悲恋の病として描き、そこに『源氏物語』における「空蟬」の姿を重ね合わせる。また狂気の問題は島崎藤村の小説において繰り返し取り上げられるものでもある。
- 4) 中村古峯『殻』(春陽堂、1913) 198.
- 5) 小田晋『『変態心理』中村古峯——大正文化への新視覚』(不二出版、2001) 第三部『変態心理』関係資料、83.
- 6) 神谷忠孝『日本のダダ』(響文社、1987) 36-8.
- 7) 辻潤『辻潤全集 第一巻』(五月書房、1982) 298.
- 8) もちろん「発狂」は恐れられてもいた。葛西善蔵は「湖畔手記」でこう書いている。「結局Kは肺病で命を取られるだろうが、俺は何かしら?この分で行ったんでは、どうしたって狂死と云ふところかな。しかし発狂は厭だなあ。気が狂って、死ぬにも死ねず、何年か妻子たちに嘆きを見せる……気持ちがだけは厭だ。」葛西善蔵『葛西善蔵全集 第2巻』(津軽書房、1975) 520.
- 9) 玉川信明『ダダイスト辻潤』(論創社、1984) 75.
- 10) 『詩と禅』(宝文館、1969) 21.
- 11) 玉川『ダダイスト辻潤』75.
- 12) 辻潤『辻潤全集 第五巻』(五月書房、1982) 122.
- 13) 『漱石全集 第十六巻別冊』(岩波書店)によると、漱石はロンブローゾ『天才論』の英訳版(1891)に書き込みを入れていたという(『漱石全集 第十六巻 別冊』岩波書店、1967, 226)。明治40年出版の『文学論』でも『天才論』に触れている(『漱石全集 第九巻 文学論』岩波書店、1966, 115および424)。なお、詩と狂気というテーマは、マラルメやヴェルレーヌといった象徴主義の詩の翻訳とともに紹介されることになる。例えば、アーサー・シモンズ『象徴主義の文学運動』におけるジェラルド・ド・ネルヴァルに関する小論に次のような一節がある。「狂気が彼の天才を自由に解き放ち、凝固させる霊としてやってきていて、その天才の純度の高い精髓を遊離させたのだが、その天才の力というのは、幻想を、幻想のなかでももっとも儚く捉えがたい要因を、具象化し、しかも神秘の感覚を、あるいは触知しがたいものに独自の魅力を与えるような特性を、失わない力であった。だとすれば、狂気が、あたかも稲妻の閃光によってでもあるかのように、遠く離れた、互いに異なるものを結びつける隠れた環を照らし出したことになる。それはたぶん、同じように斬新な、仰天させるような、おそらく過剰なほどの真実味を帯びたように事物の情景を見て取ることが、ハシッシュや阿片や、幻覚を故意に作り出すその他の薬物の人口的な刺激によって可能になるのに幾分か似ている」(アーサー・シモンズ『象徴主義の文学運動』平凡社、2006, 98)。ちなみに本書は1913年、岩野泡鳴によって翻訳されている。
- 14) 杉田直樹『誰か狂へる』(文化生活研究会、1924) 4.
- 15) 杉田『誰か狂へる』25.
- 16) 高橋『狂人』263.
- 17) 杉田『誰か狂へる』7.
- 18) 高橋『狂人』106.
- 19) 高橋『狂人』99.
- 20) 高橋『狂人』103.
- 21) 高橋『狂人』124.
- 22) 高橋『狂人』128.

- 23) 高橋『狂人』144.

24) 高橋新吉『ダダイスト新吉の詩』(中央美術社、1923) 144.

25) 松永延造『夢を喰う人』(桃源社、1973) 68.

26) 高橋『狂人』3.

27) 高橋『狂人』4.

28) 高橋『狂人』59-60.

29) 高橋『狂人』75.

30) 鶴崎博『高橋新吉論』(河出書房新社、1987) 33.

31) この発狂に触れた箇所が他にもあるが、本論冒頭に引用したように簡略化された形で示される。「私が、この寺で、何度目かにした発狂は、言語に絶する犠牲をとまなつたのであった。最愛の父を、死に至らしめただけでも、古今に、稀有な発狂だったと言わねばならぬ。私は板敷きの二畳の牢の中に、三年間監禁されたが、これは短きに失した憂いがあるのである」高橋新吉『禅と文学』宝文館、1970、300-1)

32) 『ダガバジジンギチ物語』(思潮社、1965) 191.

33) 和田博文『日本のアヴァンギャルド』（世界思想社、2005）213.

34) ショシャナ・フェルマン『狂気と文学的事象』（水声社、1993）102.

35) 高橋『狂人』65.

36) 古俣裕介が指摘するように、萩原恭次郎は『死刑宣告』において意図的に伏字を用いている（「走って/走って/走る本能の激怒/——あの××××××/——あの××××××××××」）。この×××の部分『赤と黒』初出の詩では「——あの人間を墓場へ/——あの人間の椅子を主人なく」と書かれていた。これは検閲による削除ではなく、技法としての伏字であったのだろう。古俣裕介『〈前衛詩〉の時代——日本の1920年代』（創成社、1992）46-53。参照。

37) 高橋『狂人』88-9.

38) 芥川龍之介『芥川龍之介全集 第15卷』(岩波書店、1997) 84.

39) 高橋『狂人』90.

40)「言葉に若し意味を持たせるならば重大な過誤を生ずると云ふものだ」(高橋新吉『大和島根』(擁書閣赤門書房、1943) 116.

41) 高橋『狂人』65.

42) 高橋『狂人』84.

43) 高橋『狂人』103-4.

44) 高橋『狂人』247.

45) 高橋『狂人』254-5.

46) 高橋『狂人』68.

47) 高橋『狂人』152.

48) 高橋『狂人』209.

49) 高橋『狂人』219.

50) 高橋『狂人』336.

51) 杉田『誰か狂へる』6.

52) 高橋新吉『戯言集』(読売新聞、1934) 国会図書館「近代デジタルライブラリー」で確認したが、本書にはページの記載がない。

53) 高橋『新吉詩抄』44.

54) 高橋新吉『高橋新吉詩集』(南宋書院、1928) 45.

55) 萩原朔太郎『月に吠える』第二版（アルス、1922）4-6.

56) 『高橋新吉詩集』 23

57) 「詩的な言語は散文の廢墟の上に現れる。そこでは言葉が裏切りであり、伝達が不可能であるとすれば、そのときおのおのの言葉はみづからその個別性を回復し、われわれの敗北の道具となり、伝達不可能なものとなる。」

の隠匿者となる。それは伝達すべきものが他にあるということではない。そうではなくて散文による伝達が失敗したときに、言葉の意味そのものが、純粹に伝達不可能なものとなるということである。こうして伝達の失敗は、伝達不可能なものを示唆する。言葉を利用する企てが失敗すれば、言葉の無関心的な純粹直感がそのあとを襲う。……このより一般的なペルスペクチヴのもとでは、失敗に絶対的な価値をあたえることに他ならない。私はそれが現代詩の起源にある態度だと思う。」サルトル『サルトル全集第9巻シチュアションⅡ文学とは何か』（人文書院、1965）69.

58) サルトル『サルトル全集第9巻』69.